様式第９号（第 13 条関係）

事　業　実　績　書

１　事 業 名　　演劇手法を用いた要配慮者の避難行動支援ワークショップ

２　実施期間　　令和　５年　４月　１日～令和　６年　２月　２９日

３　事業内容

① 事業の目的・概要

要配慮者が災害時に避難行動する際の不安や遠慮、ためらい等の困難さがあることを、演劇の手法を用い、参加者自らが疑似体験することで理解し、円滑な避難行動へ結びつけるためにはどのような関わりが必要かを知っていただくことで、逃げ遅れゼロのまちづくりを目指す。

② 事業の流れ等

★年間の流れ：前期後期の 2 クールで「老いと演劇・防災ワークショップ」（1 クール５回）を開催。前後期ともワークショップ終了後に受講者発表会を開催。前期ワークショップ終了後の 9 月に講師である菅原氏主宰の劇団「OiBokkeShi」への視察、11 月には倉敷市への招致指導を実施。倉敷市への招致指導と併せて「真備復興ツアー（第 1 弾）」を開催し、ツアー終了後、裾野拡大を狙い、参加者を交えて「老いと演劇・防災ワークショップ（体験）」を実施。後期ワークショップ最終日には「真備復興ツアー（第 2 弾）」を実施し、県内外から集まった復興ツアー参加者を交えて、受講者発表会を開催。年度末には 1 年間の動画を視聴し、振り返りの会を実施。

★実施地域：倉敷市真備町

★対象地域：備中県民局管内

★前期ワークショップ（令和 5 年 6 月 22 日～8 月 27 日　全 5 回開催）

第 1 回 実施日：令和 5 年 6 月 22 日（木）
内容：相手の気持ちを受け入れることを学ぶ
参加者数：25 名

第 2 回 実施日：令和 5 年 7 月 6 日（木）
内容：相互理解について学び、災害時の避難行動を考える
参加者数：25 名

第 3 回 実施日：令和 5 年 7 月 27 日（木）
内容：災害時の要配慮者の避難について学ぶ
参加者数：24 名

第４回 実施日：令和 5 年 8 月 10 日（木）
内容：様々な側面から一人の要配慮者を理解する
参加者数：17 名

第 5 回 実施日：令和 5 年 8 月 27 日（日）
内容：発表会を通じて、観客と共に様々な側面から一人の要配慮者を理解し、具体的なかかわり方を考える。

参加者数：23 名・発表会参加者 29 名

★先進地奈義町への視察・指導

実施日：令和 5 年 9 月 7 日（木）

内容：先進地である奈義町の劇団「OiBokkeShi」のメンバーを交えて、老いと演劇ワークショップを開催する。また、交流の時間を設け、OiBokkeShi が町ぐるみでの取り組みとなった経緯や工夫した点、改善してきた点等、今後の活動に必要なノウハウを学ぶ。

★倉敷市招致指導及び真備復興ツアー（第 1 弾）

実施日：令和 5 年 11 月 9 日

内容：奈義町から菅原氏主宰の劇団員を招致、真備復興ツアー参加者と共に演劇ワークショップに参加し、指導を受ける。

★後期ワークショップ（令和 5 年 12 月 7 日～令和 6 年 2 月 12 日　全 5 回開催開催）

第１回　実施日：令和 5 年 12 月 7 日（木）

内容：災害時避難の声掛けを拒否する人の気持ち（少数派の気持ち）を考える

参加者数：24 名

第２回　実施日：令和 6 年 1 月 11 日（木）

内容：前回学んだ災害時避難できない事情のある人（少数派）の気持ちを理解した上で避難の方法を探る

参加者数：13 名

第３回　実施日：令和 6 年 1 月 25 日（木）

内容：防災、認知症を題材に板挟みの状況について意見を出し合い発表する。

参加者数：23 名

第４回　実施日：令和 6 年 2 月 1 日（木）

内容：前回考えた板挟みの状況を発表し合い、他グループから状況が好転する意見を得、再演する。

参加者数：25 名

第５回　実施日：令和 6 年 2 月 12 日（月）

内容：発表会に向けた芝居作り及び発表

参加者数：16 名

★真備復興ツアー（第 2 弾）及び演劇ワークショップ発表会

実施日：令和 6 年 2 月 12 日（月）

内容：真備町内外から参加者を募り、真備町内の復興状況を見聞きしていただく。町内の様子を見学後、受講者による発表を見ていただく。

参加者：復興ツアー23 名・発表会 46 名

★寸劇動画完成報告会

実施日：令和 6 年 2 月 22 日（木）

内容：演劇ワークショップ発表会で行った演劇を動画にまとめたものを参加者で視聴。当日参加された方、演じた方、報告会で初めて見た方とで振り返り、意見交換の実施。

成果・効果

全ワークショップを通じ、一方的な講義式で学びの機会を提供するのではなく、グループでの対話や自ら演じることで体験的に理解することを重視した。結果、参加された方々は、要配慮者の避難行動や避難計画を立てる際の困難さ、関わり方の工夫、日頃からの関係性の持ち方について、楽しみながら学ぶことができている。参加したことで、要配慮者の避難行動の困難さと平時の準備（要配慮者の避難計画）の必要性や、日常的になじみの関係になっておくことこそが重要であることを自発的に考え、学ぶ機会となっている。復興見学ツアー等、県民局との協働により、様々な切り口で参加者を募集し、演じること、演技を見ることから、認知症をはじめとする要配慮者の気持ちと避難することの困難さを我が事として捉える機会となっている。アンケート結果からも、逃げ遅れゼロのまちづくりのためには日頃の関係性が大切であることを参加者へ伝えることができた。

・目標１

「認知症×防災×演劇」のワークショップの参加者及び発表会の参加者を増やす。

評価指標・測定方法	数値目標		
	当初	今年度	実績
多世代、真備町外の方を含めたワークショップの参加者数	１クール20名程度	1クール30名	平均21.4名

夕方開催としたことで、ターゲットにしていた若年層（10～20 代）の参加者を前後期とも得ることができた。また、40～50 代の方は 50%程度の参加を得ることができた。真備町外からの参加者も 6 割を超えた。

・目標 2

「認知症×防災×演劇」ワークショップの参加者及び発表会の参加者にアンケートを実施し、理解が進んだかどうかを知る。

評価指標・測定方法	数値目標		
	当初	今年度	実績
アンケートにて、防災や認知症について新たな気付きがあった人の割合	―	８０％	認知症への意識の変化＝ 演じた側 75% 観客側 63% 日頃の備えへの変化＝ 演じた側 73% 観客側 63%

・目標 3

ワークショップと視察研修を通じて倉敷市に「防災×認知症」演劇クラブ（MabiBokkeShi 仮称）を立ち上げる。

評価指標・測定方法	数値目標		
	当初	今年度	実績
演劇クラブ MabiBokkeShi	―	主要メンバー	2/21 現在

の登録メンバー		５名 協力メンバー １０名	主要メンバー 6名 協力メンバー 6名

アンケート結果から、参加者の声：

・その人の身になって考えることが大切
・「避難しない」と言う人にもそれぞれ理由があることが分かった
・どんなきっかけを作れば、避難することに前向きになってくれるかを考えることができた
・演じることで建前ではなく本音を想像できた
・つながりがあることの大切さがわかった
・若い人と高齢の人で考えの違いがあり、それを理解するのが難しいことが参加して分かった
・演技でも何を言っているのか理解が難しいことがあった。本当の避難ではもっと大変だと思った
・普段から知っていないと避難訓練は難しいと理解した
・認知症は周囲の理解が得にくいから、病気の特性を知ることが大切。学びたい。
・日頃からの備えや人との関わりが大切。
・防災の意識を高めることができたので、ぜひ実践したい。
・備えの大切さを痛感した
・ワークショップに毎回参加しているので防災や日頃の備えへの意識がかなり変化した
・防災意識を高めることができたので、ぜひ行動に移したい
・老親とは常日頃より防災について話し合っておくべきと思いました
・家族、地域とのコミュニケーションを日頃から深めることが大切だという意識の変化
・自分たちは備えていても、家族と介護が必要な人には普段備えがいると改めて理解できた
・災害への備えについて、日頃から考えているつもりでも、もっと具体的にイメージできた
・世代間交流の手法として利用できると思います
・実際に演じてみて、その後のディスカッションで色々な気づきがあった
・普段からこういう会を通して考えることが大事だと感じられ楽しく考えれた
・防災グッズ、今準備している物では足りない可能性が高く、改めての見直しが必要であると思った
・小さい地域での避難訓練をする予定だが、まだできていない、今日の事が参考になれば良いと思う
・ワークショップ発表会を自分の地域や特に若い世代(小中高校生)にも広げていく事が喫緊の課題だと心から感じました。多くの気付きをいただきました。

③ 今後の課題･展開等

逃げ遅れゼロのまちづくりを叶えるために、高梁川流域の住民につながりの大切さ

を広く知って頂くには、被災地真備町での開催が有効と考え開催したが、実践する中で、高梁川流域に限らず、広く県内外からの参加者を得ることができ、演劇を通して学ぶという手法に興味を持つ方は、広範囲に存在することが分かった。「MabiBokkeShi」については、主要メンバーとして活動可能な方も一定数確保でき、講師である菅原氏の協力を得ながら、依頼があれば即興劇として活動することは可能となった。今後もワークショップ開催を年に数回単位で継続しつつ、要配慮者の避難行動やマイタイムライン作成について、演劇公演の依頼があれば、登録メンバーに呼びかけ、移動可能な範囲内で活動を継続していく方針。財源については菅原氏と検討中。

④ 県民局と協働した効果及び課題

山陽新聞への掲載や FM 倉敷への出演により、想定以上に広く県民局管内の参加者を得ることができた。特に後期ワークショップ受講者発表会については、真備復興ツアーと同日に開催したことにより、日頃要配慮者や認知症に関心の低い属性の方も多くご参加いただくことができた。そういった方々に発表会を観覧していただけたことは、自分たちの広報だけでは果たせなかったことだと感じている。また、この繋がりは、今後の自分たちの活動へ生かすことができるものと考える。

4　参考事項・資料

写真（データでも提出すること）

当日資料

アンケート結果　他